

【研究ノート】

「多文化親子サロン」の活動を通じた学生の学びに関する実践報告

岡崎女子大学 宮腰宏美

要 旨

本研究では、「多文化親子サロン」のイベントに参加した学生に質問紙調査を行い、活動を通じた学生の学びを調査した。

イベントを通し、学生は、言葉やコミュニケーションについての学びを多く得ることができ、今後の学びに繋げていた。一方で、イベント自体の課題としては、外国籍児童および保護者と日本人参加との更なる交流が求められた。次回の企画では、参加者同士の交流がより深まるよう、内容を吟味していくことを今後の課題としたい。

1. はじめに

日本における外国籍児童数は増加傾向にある。高橋は、外国籍の子どもの数は、地域によって大きな差があるものの、2019年度時点で、日本で生まれた子どものおよそ50人に1人は、外国籍であると述べている¹⁾。また、今後、外国籍児童数は増え続け、2030年には、0～9歳児占める外国籍の子どもの割合は9.5%となり、2045年には14.3%、2065年には20.3%にもなるという予想もあると示唆している²⁾。

今回行ったイベント「多文化親子サロン」における岡崎市多様性社会推進課の担当者は、外国人市民の増加と定住化に伴い、教育・保育の現場でも多文化共生の視点が求められており、外国人児童生徒の就学支援に取り組む中で、普段日本人と交流する機会の少ない外国人家庭にとって、子どもが乳幼児の段階から日本人家庭と自然に交流できる居場所づくりが必要であると考えている。そこで、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学において、多文化共生のイベントを通して、参加の親子が居場所やネットワークのづくりを行うことができること、また、参加学生がやさしい日本語や簡単な外国語を使い、体験を通して学ぶことができることを活動の目的とし、10月と11月に多文化共生のイベント「多文化親子サロン」を行った。

学生が多文化共生イベントから多くのことを学ぶことができることは予想されており、高橋も「日本国籍であったり、日本語の日常会話が充分にできる子どもであったとしても、文化的多様性がないということはない。したがって、すべての子どもたちをよく理解するためには、子どもたちの民族的・文化的背景が多様であることにまず目を向けることが教職員にとって欠かせない」³⁾と述べており、今後の日本社会における教育業界において、多文化理解に関する知識や体験、経験は欠かせないと考えられる。

今回の多文化共生のイベントでは、岡崎市の多様性社会推進課と協働し、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学のhyggeエリア⁴⁾にて多文化共生イベントの活動を行うことにより、外国籍の親子が楽しみながら日本人家庭や学生と交流することにより、居場所やネットワークづくりに貢献することを目的とした活動を行った。

本研究では、参加した学生に質問紙調査を行うことで、活動を通じた学生の学びを調査し、今後の本学における活動の課題についての考察を行う。

2. 外国籍児童の不就学について

岡崎市の「岡崎市多文化共生推進基本指針(平成 25 年度～平成 32 年度)」は、「2012 年 1 月 1 日現在の外国人市民数は、68 カ国、9,968 人で、人数の多い国順に、①ブラジル (3,951 人、39.6%)、②中国 (1,837 人、18.4%)、③韓国朝鮮 (1,591 人、16.0%)、④フィリピン (1,529 人、15.3%)、⑤ベトナム (242 人、2.4%)、⑥ペルー (161 人、1.6%)、⑦ネパール (104 人、1.0%) となっており、上位 4 カ国で全体の 9 割近くを占めている」と報告している⁵⁾。

新藤は、ブラジル人の子どもの不就学の問題について、文部科学省が 2006 年に行った全国のブラジル人集住地域 12 か所で行った、児童生徒の不就学実態調査について述べており、結果として、公立学校に通う者が 60.9%、ブラジル人学校に通う者が 20.5%、不就学が 1.1%で残りの 17.5%は、帰国・転居であったと述べている⁶⁾。

不就学の定義について、佐久間は、義務教育の学齢に達しておりながら、どの教育機関にも所属しておらず、学籍そのものがない状態をさしているとしている⁷⁾。また、転居による住居不特定の状態及び外国人登録が未登録であることにより、公的機関から就学通知が来ないことによるものが原因であるとしており、住居不特定については、上述の 17.5%にあたる帰国・転居にあたる⁸⁾と述べている。

外国人児童・生徒の不就学には、5 つ位の理由があり、一つ目は、本人の学習意欲の欠如によるもの、二つ目は、両国を行ったり来たりする中で、学修困難となったり、親の職業が不安定であることが学習意欲を低下させるなど、両親や家族に起因しているもの、三つ目は、いじめなどの人間関係が原因であること、四つ目は、日本語指導や受け入れ態勢の不備で授業についていけず、学校が面白くないことから行かなくなる場合、五つ目は、制度的・構造的に外国人を不就学状況に追い込む日本の教育界の閉鎖的システムであると説明がなされている⁹⁾。

四つ目の日本語指導について、小島は、2018 年度に公立学校に通う外国籍の児童生徒 80,119 人のうち、50.9%が日本語指導を必要としており、母語の多い順に、ポルトガル語 (9,851 人)、中国語(8,427 人)、フィリピン語(6,755 人)、スペイン語(3,507 人)、ベトナム語(1,744 人)、英語(1,032 人)、韓国・朝鮮語(537 人)、その他(4,723 人)と述べている¹⁰⁾。

学齢期の児童生徒への支援について、文部科学省は、帰国・外国人児童生徒に関する主な施策の大項目として、1. 指導体制の確保・充実、2. 日本語指導担当教師等の指導力の向上、支援環境の改善、3. 就学状況の把握、就学の促進、4. 中学生・高校生の進学・キャリア支援の充実、5. 異文化理解、母語・母文化支援、幼児に対する支援を挙げている¹¹⁾。

文部科学省は、5. の「幼児に対する支援」として、外国人幼児のための就園ガイドを多言語で作成していると述べている¹²⁾。上述の就園ガイドは、やさしい日本語、英語、韓国・朝鮮語、ベトナム語、フィリピン語、中国語、ポルトガル語、スペイン語で作成されており、内容としては、就学前教育の種類や年齢について、幼稚園での生活や時間について、入学条件について等が記載されている¹³⁾。

多文化子育てネットワークの「保育所を利用している外国人の保護者に対する調査」において、外国籍の保護者の保育園生活での気がかりなことについて、「裸足や薄着」が 1 位(30.9%)、2 位「いじめ」(30.0%)、3 位「日本人保護者とのつきあい」(17.6%)、とな

っており、特に「いじめ」については、「子どもが、日本語が不得手だから」、「外国人だから」、との理由でいじめられているのではとの心配が記されていると、林は説明している¹⁴⁾。

よって、学齢期以前の子どもを対象とした日本語の支援や外国人の保護者が日本人の保護者と接点ができるような取り組みが期待されている。

3. 岡崎市における外国籍の保護者や児童への支援について

岡崎市は、「岡崎市多文化共生推進基本指針」における多文化共生の基本理念として、「互いの文化を認め合い、誰もが地域の一員として、ともに支えあう共生のまち岡崎」としており、基本目標としてⅠ多文化共生の地域づくり、Ⅱ自立を促進する支援、Ⅲ生活にかかわる支援、Ⅳ推進体制の整備を挙げている¹⁵⁾。

Ⅰ多文化共生の地域づくりの施策の方向として、日本人市民の外国人市民に対する偏見をなくし、身近なパートナーと感じてもらうための施策に取り組むこと、外国人市民が地域活動へ参加しやすい環境を整え、地域住民との交流を促進するための施策に取り組むこととしている¹⁶⁾。Ⅱ自立を促進する支援では、施策の方向として、日本語学習の支援、日本の生活ルール等への理解促進、相談業務の拡充、外国人コミュニティの育成、ボランティア団体(NPO・NGO)との連携が述べられている¹⁷⁾。Ⅲ生活にかかわる支援としては、施策の方向として、多言語情報の提供、医療・保険・福祉の支援、子どもの教育支援、労働に関する支援、住居に関する支援、防災に関する支援が挙げられている¹⁸⁾。Ⅳ推進体制の整備としては、庁内組織の整備、関係機関等との連携、ボランティア団体(NPO・NGO)の支援とされている¹⁹⁾。

岡崎市の多様性社会推進課には、多文化共生関係の推進にかかる様々な取り組みがなされており、国際化・多文化共生の推進として、外国人相談窓口の設置、多文化共生推進事業、多言語による生活情報の提供、外国人市民の防災対策、姉妹友好都市の紹介、ボランティアの支援等を行っている²⁰⁾。上述の多文化共生事業においては、日本語教室、町内会の文書の翻訳、やさしい日本語文書作成事業、コミュニティ通訳員の配置、生活ルール講座の開設、あいち医療通訳システムの設置を行っている²¹⁾。日本語教室は、「図書館交流プラザりぶら」の施設内に「りぶら国際交流センター」にて行われており、日本語教室や各種イベントが定期的開催されている²²⁾。2021年度のイベントは、「英語でフィリピン料理」および「おうちで作るパイ・プラティンダ(モルドバ料理)」が行われている²³⁾。

今回の岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の学生による、岡崎市の多様性社会推進課と連携をしたイベントは、上述のイベントの一環であり、また、Ⅳの関係機関等との連携に入ることが考えられる。

4. 研究の目的

本研究では、参加した学生に質問紙調査を行い、活動を通じた学生の学びを調査し、今後の本学における活動の課題について考察を行う。

5. 対象と方法

(1) 調査対象について

研究対象は、幼稚園教諭免許状、保育士資格の取得を目指す、岡崎女子大学の子ども教育学部および、岡崎女子短期大学の幼児教育学部に所属する学生のうちの12名である。

(2) 研究方法と質問項目について

研究期間は、2022年10月15日（土）及び、2022年11月26日（土）に行ったイベントの際に、外国籍の親子と日本人の親子を対象とし、両者の交流を目的としたイベントに参加した学生へ質問紙調査を行った。

質問紙調査の結果をデータ入力し、選択式の質問紙調査については、単純集計を行った。また自由記述については、自由記述の内容について分類し分析を行った（有効回答数 12）。

岡崎女子大学の学生6名が企画及び実施した10月15日のイベントには、外国籍と日本国籍の親子併せて7組（外国籍12名、日本国籍10名）22名が参加した。参加した外国籍の方々の国は、ブラジルとフィリピンであった。

岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の学生6名が企画・実施した11月26日のイベントには、外国籍の親子4組と日本国籍の親子5組（外国籍11名、日本国籍12名）23名が参加した。参加した外国籍の方々の国は、ブラジルとフィリピンであった。

質問項目については、添付資料参照。

6. イベントのための準備と当日の運営について

先述の通り、「多文化親子サロン」は、岡崎市多様性社会推進課の担当者が主として行い、そのイベントに岡崎女子大学・岡崎女子短期大学の教職員および学生が当日のイベント運営側として、参加をしたという形になる。よって、当日参加した外国人市民は、岡崎市を通して参加した方々であり、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学は参加者の募集には関わっていない。

2022年10月15日（土）のイベントは大学の年間計画の中では後期授業期間に行われたが、前期より参加学生の募集、イベント開催のための打合せを行っている。参加学年は学年、学部学科も様々であったことから、毎回昼休みに打合せを行った。第1回の打合せでは、集まった学生に教職員から概要が述べられ、それに基づき、その後の集まりにおいて、当日のテーマ（10月はハロウィン）を決め、テーマに沿った英語の歌やゲームなどの準備を行っていった。当日は、参加者が外国籍児童ということもあり、歌やゲームの説明を英語で行ったのち、日本語で説明を入れるなど、英語と日本語の両方を使用しながら運営を行った。学生が主となり、準備・運営を行い、教職員は準備段階では、アドバイスをするなど、一緒に時間を過ごしながら助言や書類等裏方の準備に徹した。

2022年11月26日（土）に行ったイベントは、祭りをテーマとして行った。参加した外国籍児童に、日本文化を体験してほしいという学生の思いから、参加児童に法被を着てもらい、フェルトで作ったシャリや寿司の具を使い、握り寿司を作る体験をしたり、射的や折り紙、お面をつくるコーナーを設けるなど、学生の思い描いた縁日のスペースを提供した。また、準備についても10月のイベントと同様に、前期授業期間より、準備に向けた打合せを行っている。実際の準備は後期授業が始まってから主に昼休みを使って行った。

7. 結果と考察

(1) 質問項目(1)「外国籍児童へのボランティア活動を実施して、ためになったことや学んだこと」について

自由記述には、「外国の方とのコミュニケーションに不安を感じていたけれど、相手の方から話しかけて下さったり、ジェスチャーで話せることがあって、とても楽しかった。」

「外国語が話せなくてもコミュニケーションがとれること。でも、少し話せた方が良かったと思った。」「難しい言葉は通じないけれど、ボディランゲージや言葉を簡単にしたり、ジェスチャーしたりと、工夫をすれば、伝わるということを改めて学ぶことができました。」等、言葉やコミュニケーションに関する記述が最も多く見られ、実際に外国籍の親子と関わることにより、日本語なり、外国語なりを使って、何とかコミュニケーションをとることの必要性を感じることができたと考えられる。文部科学省の「小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 外国語活動・外国語編」にも「(省略) 母語を用いたコミュニケーションを図る際には意識されていなかった、相手の発する外国語を注意深く聞いて何とか相手の思いを理解しようとしたり、もっている知識などを総動員して他者に外国語で自分の思いを何とか伝えようとしたりする体験を通して、日本語を含む言語でコミュニケーションを図る難しさや大切さを改めて感じる事が、言語によるコミュニケーション能力を身に付ける上で重要であり、言語への興味・関心を高めることにつながると考えられる。」²⁴⁾と述べられており、教育者を目指す者には、子どもの気持ちを理解するという点において、大変効果的な活動であると考えられる。

(2) 質問項目(2)「参加者の様子」について

自由記述には、「楽しんでいて。国を超えて制作活動では、色々な言葉で自己紹介をしていたりなど、とても良い環境になっていた。」「楽しそうでした。話しかけて、楽しかったか聞いてみても、「また来たい!」と言っていただけて、楽しそうな雰囲気がとても伝わってきた。」「楽しそうだった。日本の子と外国の子と一緒にコミュニケーションをとっていた。」「楽しそうだった。言葉が通じなくても、ジェスチャーや紙を通してコミュニケーションをとれた。積極的に参加してくれた。」等、参加者が楽しんでくれたことや国籍を問わず、参加者同士がコミュニケーションをとっていたこと、学生と参加者とのコミュニケーションがとれていたことの記述が見られた。「一緒に楽しめる空間」という場の設定をすることにより、参加者同士がコミュニケーションを通し楽しむことができることが確認されたと考えられる。

一方で、「意外と明るく話しかけてくれたり、子どもたちと積極的に遊んでくれていたし、お寿司だったり、射的だったり、日本ならではのものをすごく喜んでくれていた感じだったが、ブラジルの方と日本の方たちとの交流が少なかったかなと思った。もっとたくさん交流するために、もっと課題があったと思う。」という意見も見られた。特に 11 月のイベントでは、当日外国籍と日本国籍の大人の交流があまり見られなかったと筆者も記憶しており、参加者同士が一緒に楽しめる空間の提供においては、プログラム次第で、参加している子どもたちも付き添いの保護者も交流ができたり、できなかったりすることが考えられることから、提供プログラムの吟味を行う際に、「参加者同士の交流」という視点から行う必要があると考える。

(3) 質問項目(3)(4)の「外国籍児童や保護者への見方の変化」について

「外国籍の方とはなかなかコミュニケーションをとるのは難しいと思っていたけれど、いざ、話してみると、お互いに理解しようという気持ちでとてもコミュニケーションが取りやすかった。」「もっと言葉が伝わらないと思っていたけれど、割と通じた。」「想像していた以上にコミュニケーションがとれるし、取ろうとしてくれる。」「外国語しか話せないと思っていた自分がいて、対応に困ると思っていたのですが、保護者の方から話しかけても

らったりなどして、少しずつ日本語を話す姿を見て、自分勝手な思い込みがあったことが分かりました。」「言葉が通じないことは、さほど大きな壁ではないこと。」等の記述が見られた。外国籍児童や保護者との言葉やコミュニケーションについての不安は、イベントを通し実際に接したことにより払拭されたと考えられる。また、学生が外国籍の参加者とコミュニケーションをとることにおいて、言葉のみに頼らなくてもとることができることが分かったことは、参加学生にとって大きな学びとなり、今後の同イベント開催に繋がる安心材料の一つとなったと考えられる。

(4) 質問項目(8)の「保育者や教育者になる前に、学んでいきたいこと」について

「外国籍の人と関わるためのコミュニケーションスキル」「文化について、英語等の語学」「言葉を少しでも勉強して、コミュニケーションを取れるようにしたい。」「様々な国の簡単な単語・保護者との関わり方」「ポルトガル語をもう少し勉強したり、話せるものを増やしたい。」等、語学、コミュニケーションスキル、相手の国の文化が挙げられていた。イベントを行った学生は、保育や教育学を専攻しており、語学や異文化理解を専門としている訳ではないが、外国籍親子との関わりを通し、実際に保育者や教育者になった際にも語学や異文化理解、異文化コミュニケーションの技術が必要であることを実感したのだということが確認された。また、自由記述には、「音楽は国関係なく楽しめると思うので、今のうちに手遊びを覚えたいです。様々な場面で使えるようにすると、関わる方法が増えると思います。」「基本的な英語は聞き取れるようになりたい。また、英語の手遊びもできるようになると良いと思った。」との記述が見られ、「英語の手遊び」の習得については、参加学生が保育者や教育者を目指していることが利点として働くことを理解していることが確認された。記述した学生は、大学における英語授業の中で、英語の手遊びを学んでおり、学んだ英語の手遊びが活かされる場面を体感したことが授業と現場で繋がったことが伺われ、保育者、教育者養成校における英語授業の重要性を再確認することができた。

(5) 今後の活動について

質問項目(6)「今後も外国籍の方々と関わっていききたいか」、(7)三河地区には様々な国から来た外国籍児童が、他の地域と比べて比較的多くいるが、保育者や教育者になった際に、積極的に外国籍児童に関わっていききたいか」について、全員が「はい」と回答した。

また、質問項目(10)「今後も外国籍の親子を対象としたイベントを行っていききたいか」については、回答者全員が肯定的な回答を示した。理由として、「自分の将来に役立つ、なかなかそのような機会はないから。」「もっと色々なところでこのような交流を広げて、国籍関係なくたくさんの文化や色々な人たちとの関わりをもっと増やしていきたい。」「とても楽しかったし、来てくださった方が楽しんでいる姿を見たから。」「得た学びを活かして繰り返すことで、コミュニケーションを身に付けたい。」等の記述が見られた。自由記述にもあるよう、外国籍の親子と接する機会は、自分から探さなければ見つけることができない日本において、このような機会を自分から獲得し、それを継続することより、更に大きな学びに繋げることができるであろうと推測する。

質問項目(12)「今後、再び外国籍の親子を対象としたイベントを行うとしたら、どのような活動を行いたいか」については、「子どもは体を動かすことが好きそうだったので、外で遊ぶ活動をしたい。」「次は参加者同士の国についてやるのも良いと思う。」「日本語や日本文化だけでなく、他の国や色々な文化を対象にやってもいいと思った。」「親子、日

本と海外の子たちがたくさん関わるができる活動。」「少し難しいけれど、食育的なものとか、小さい運動会的なもの。日本語だけじゃなく、英語も使ったもの。」等の意見が挙げられた。本年度の7月に、筆者のゼミナール3年生が「丘の上の子ども食堂」のイベントを岡崎女子大学・岡崎女子短期大学にて行った²⁵⁾。岡崎市社会福祉協議会と協働した、所謂「子ども食堂」をイベントとして行ったため、来場した子ども約50名に遊びを提供し、協賛をいただいた企業（第一生命株式会社岡崎支店、太田油脂株式会社、オカザキ製パン株式会社）から頂いたグッズ、お菓子やパンを提供し、自分達からはお弁当を提供した²⁶⁾。提供した「遊び」では、アメリカやスペイン、韓国やブラジルなどの文化を紹介したり、その国のイメージを取り入れた遊びを提供したという企画であった²⁷⁾。参加した親子の反応はとても良かったことから、そのような、「多文化」に関するイベントを多文化親子サロンでも企画する案も考えられる。

8. まとめと今後の課題

本研究では、「多文化親子サロン」のイベントに参加した学生に質問紙調査を行い、活動を通じた学生の学びを調査するとともに、今後の企画への提案を行うことを目的としていた。

今回の「多文化親子サロン」という、参加者同士が「一緒に楽しめる空間」の場の設定を行うことにより、参加者同士がコミュニケーションを通し楽しむことができることが確認され、このような企画を行うこと自体の意義が見られた。しかし一方で、「ブラジルの方と日本の方たちとの交流が少なかったかなと思った。もっとたくさん交流するために、もっと課題があったと思う。」という意見も見られ、参加者同士が一緒に楽しめる空間の提供においては、プログラム次第で、効果が変わることから、提供プログラムの吟味をする際には、「参加者同士の交流」という視点から行う必要があり、これを今後の課題としたい。

当初学生は、外国籍児童や保護者との言葉やコミュニケーションについての不安をもっていたが、イベントを通し実際に接したことにより、払拭されたと同時に、日本語や外国語を使い、なんとかコミュニケーションをとることの必要性を感じることができたことは大きな収穫であり、また今後の語学勉強やコミュニケーションスキルの習得への意欲を高めた結果となった。学生自身も、語学、コミュニケーションスキル、相手の国の文化について今後学んでいきたいという自由記述が多く見られ、保育や教育学を専攻している参加学生が語学やコミュニケーションスキルを習得するとともに、英語の手遊びなどを習得することで、就職後の実際の保育現場においても活かすことができるイベントであることが確認された。

参加した全員が次回以降のイベントへの参加を肯定的に捉えており、次回以降で行いたいイベント内容もそれぞれに考えが見られる。学生の「体を動かすこと」「参加者同士の国」「他の国や色々な文化」「食育的なもの」などのキーワードから、7月に行った「丘の上の子ども食堂」のイベントがイメージとして挙げられる。「多文化」や「食」を取り入れ、「多文化親子食堂イベント」として、外国籍の親子にも子ども食堂イベントに参加してもらう方法もあることを次回の参加学生に提案したい。

附記

本研究は、令和4年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理

審査No. 22014 の承認を受けて実施している。

注

- 1) 高橋史子「日本の学校も多文化社会の中にある」中村高康・松岡亮二編著『現場で使える教育社会学 教職のための「教育格差」入門』2021年、ミネルヴァ書房 233頁
- 2) 前掲1) 233頁
- 3) 前掲1) 233頁
- 4) 子ども好適空間 (hygge エリア) は、「夢中になれる空間」「居心地がよい空間」「安全・安心な空間」についての研究をふまえてかたちにした施設で、hyggelab (子ども好適空間研究所)、hygge あそびの箱、hygge おはなしの森、hygge ともそだち広場の4つの空間で構成される²⁸⁾。
- 5) 岡崎市「岡崎市多文化共生推進基本指針(平成25年度～平成32年度)」2013年、https://www.city.okazaki.lg.jp/1300/1303/1321/p012664_d/fil/file_1.pdf (2022年9月15日最終閲覧)
- 6) 新藤慶「外国につながる子どもの貧困と教育」松本伊智朗・佐々木宏・鳥山まどか『教える・学ぶ 教育に何ができるか』2019年、明石書店 110頁
- 7) 佐久間孝正『外国人の子どもの不就学』2006年、勁草書房 61頁
- 8) 前掲7) 64-65頁
- 9) 前掲7) 74頁
- 10) 小島祥美『Q&A であわかる外国につながる子どもの修学支援「できること」から始める実践ガイド』2019年、明石書店、17-19頁
- 11) 文部科学省「外国人児童生徒等教育の現状と課題」2021年、https://www.mext.go.jp/content/20210526-mxt_kyokoku-000015284_03.pdf (2022年9月15日最終閲覧)
- 12) 前掲10)
- 13) 文部科学省「外国人幼児等の受入れにおける配慮について」2020年、https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/mext_00505.html (2022年9月15日最終閲覧)
- 14) 林恵「外国にルーツがある子どもの就学に向けた子どもと保護者への支援——外国人保護者への調査から——」『帝京短期大学紀要(19)』、2017年、33-42頁
- 15) 前掲5) 10頁
- 16) 前掲5) 11頁
- 17) 前掲5) 11-12頁
- 18) 前掲5) 12-13頁
- 19) 前掲5) 13-14頁
- 20) 岡崎市「多様性社会推進課」2022年、<https://www.city.okazaki.lg.jp/1550/1556/1717/p019885.html> (2022年9月15日最終閲覧)
- 21) 前掲20)
- 22) 前掲20)
- 23) 岡崎市「りぶら国際交流センター (りぶらこくさいこうりゅうせんたー)」<https://www.city.okazaki.lg.jp/1500/1506/p012191.html> (2022年9月15日最終閲覧)
- 24) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編』2017

年、16 頁

- 25) 宮腰宏美「保育資格、幼稚園教諭免許、小学校教諭免許取得を目指す学生の英語活動を伴った子ども食堂の活動を通じた学びについて—岡崎市社会福祉協議会や岡崎市の企業の協力を得て—」『子ども好適空間研究』2023 年、93 頁
- 26) 前掲 25) 96 頁
- 27) 前掲 25) 96 頁
- 28) 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学「子ども好適空間 hygge What's hygge エリア?」
<https://www.okazaki.ac.jp/hyggelab/whats-hygge-area/> (2022 年 12 月 2 日最終閲覧)

添付資料

外国籍児童へのボランティア活動を通じた学びについての調査

本日は調査にご協力いただきありがとうございます。
この調査は、外国籍児童へのボランティア活動を通じた学びの効果を検証するものです。この調査機関中は、活動の度に記名による質問紙調査をさせていただきます。
回答は記名で行われますが、全て調査者の厳重な管理のもとで、個人情報の保護に最大限の配慮をいたします。また、この調査には、自由に参加を拒否、辞退でき、それによる不利益を被ることは一切ございません。

アンケートが研究に使用されることに（ 同意する ・ 同意しない ）

※以下の欄に○をつけたり、記入したりしてください。

将来希望職種について

（ 保育士 ・ 幼稚園教諭 ・ 小学校教諭 ・ まだ決めていない
その他（ ）

1. 外国籍児童へのボランティア活動を実施して、ためになったことや学んだことをお書きください（自由記述）

2. 外国籍児童へのボランティア活動への参加者の様子は如何でしたか？（自由記述）

3. 今回のイベントを通して、外国籍児童や保護者に対する見方の変化はありましたか？
（ あった⇒4へ ・ なかった⇒5へ ）

4. 3で「あった」と回答した方は、どのように変化しましたか？

5. で「なかった」と回答した方は、なぜ変化しませんでしたか？

6. 今後も外国籍の方々と関わっていきたいですか？
（ はい ・ いいえ ）

7. 三河地区には様々な国から来た外国籍児童が、他の地域と比べて比較的多くいるかと思えます。
保育者や教育者になった際に、積極的に外国籍児童に関わっていきたいですか？
（ はい⇒8へ ・ いいえ⇒9へ ）

8. 7で「はい」と回答された方は、保育者や教育者になる前に、学んでいきたいことがありますか？

9. 7で「いいえ」と回答された理由をお書きください。

10. 今後も外国籍の親子を対象としたイベントを行っていきたいですか。
（ 是非行いたい ・ できれば行いたい ・ あまり行いたくない ・ 行いたくない ）

11. 10の理由をお書きください。

12. 今後、再び外国籍の親子を対象としたイベントを行うとしたら、どのような活動をしたいですか。